[研究ノート]

チベットの歴史と服飾について（上）

森　川　登美江

は じ め に

2006年７月，5000mもの高地を走るため実現は不可能と考えられていた“青蔵鉄道”が多くの困難を乗り越えてついに完成し，旅客輸送を始めた。そのためチベットには世界中から熱い視線が向けられ，観光客が押し寄せている。そこで今，中国で最もホットな地，チベットについて調べてみた。チベット自治区の人口は2005年末現在，273万6800人余り，面積は122.84万平方キロ，人種はチベット族を中心に漢族，メンパ族，ロッパ族，デンパ族，シェルパ族，回族など。言語はチベット語と漢語で，宗教はチベット仏教である。

筆者は10年ほど前，勤務先の大分大学で「アジア学」を担当することになり，教材の一つとして民族衣装を着用するようになった。最初は「受講生が興味を持ってくれれば」くらいの軽い気持ちだったが，予想外に関心が高く，毎週の衣装を楽しみにしてくれている受講生が多いのが分かってきて，熱心に集め始めた。この10年間に収集した衣装は三十数カ国，160着余，バッグ数十個，帽子20個余，スカーフなど数十枚，履物も十数足ほどになり，各国，各民族の服飾の比較も多少可能になってきて，研究対象としても面白くなり始めた。衣装のデザインや模様に籠められた民族の歴史や願望などを筆者自身がもっと理解できるようになれば，筆者の「アジア学」などの講義ももう少し深みが増すのではないかと思う。そのためにしばらくアジアの民族服飾を中心に研究を続けていきたいと考えている。

なお，本稿では衣服以外の髪型とかアクセサリーなども取り上げるため，「衣装」より広い概念を表す「服飾」という語彙を使用した。

《チベットの歴史》

チベット族は，悠久の歴史を持つ民族で，少なくとも新石器時代にすでにチベットの山南に生活し,自ら「博」と呼んだが，居所に応じてまた「博巴」「康巴」「安多哇」「嘉戎哇」などの異なる呼び方もあった。その民族の元は山南一帯の土着民族からなるが，後に次第に四方へ発展し，チベット高原の他の部族，例えば蘇毘，羊同，白蘭，附国などと相互に融合して大きくなっていった。二千年前余り前の初代のチベット王，ニャティ・ツァンボの創立と，その後代の不断の努力によって，7世紀になると，吐蕃王朝を創り上げた[1)]。その後のチベットの歴史は大きくは以下の３つに分けられる。

＜第１期＞７～９世紀　強大な軍事帝国

建国以前のチベット高原には，羌，ギャロン，ミニャク，モンなどの諸部族が小王国をなして割拠し，全体として西チベットに拠点を置くシャンシュン国に服属していた。それらの小王国のうち，チベットの東南地方，ヤルルン渓谷で農耕を主とする小王国の長が，周辺の諸族と誓約を結び，シャンシュンの支配に反旗を翻した。その子ソンツェン・ガンポ（在位581頃～649）がシャンシュンを降し，諸民族を征服・融合してチベット高原全域を統一した。そしてチベット文明の領域を確定し，中央ユーラシア全域に強い影響力を及ぼした。この後，強力な統一権力は出現しなかった。

このソンツェン・ガンポについては現代中国でも高く評価しているようで，中国の小学校の歴史教科書でも第２課に“ソンツェン・ガンポと文成公主”という項目を立て，以下のように説明している。

「世界に名高いポタラ宮は，チベット人民が敬慕する聖地である。伝えられるところによれば，ポタラ宮の最初の建物はソンツェン・ガンポがもっぱら文成

公主のために建造したものである。ソンツェン・ガンポは吐蕃の首領である。唐の時代に，ソンツェン・ガンポは青蔵高原の各部族を統一し，今日のラサを中心にして，吐蕃政権を建てた。彼は積極的に唐朝と往来し，数回にわたって人を唐朝に派遣して求婚した。吐蕃との連携を強化するために，唐の太宗は文成公主をソンツェン・ガンポに嫁がせた。文成公主は多くの書物を読み，とても才能があった。彼女は吐蕃に行くときに，大量の書籍と精巧な手工業製品，および穀物と野菜の種を持ってゆき，さらに多くの職人を連れて行った。文成公主は中原地区の先進的な養蚕と絹織物の技術，農作物の優良品種と栽培技術を吐蕃に伝え，この地の社会経済の発展を促進した。ソンツェン・ガンポは貴族の子弟を唐朝の首都長安に派遣して学習させ，中原の文化を吸収した。彼は吐蕃文字と暦法を制定した。ソンツェン・ガンポと文成公主は漢，チベット両民族の団結の強化と，チベット族の経済・文化の発展に傑出した貢献をした。

チベット民歌

漢族地区から来た王妃文成公主，
異なる穀物の種3800種類を持ってきて，
チベットの穀倉に堅実な基礎をすえる。

漢族地区から来た王妃文成公主，
異なる手工芸職人5500人を連れてきて，
チベットの工芸に発展への大門を開く。

漢族地区から来た王妃文成公主，
異なる家畜5500種を連れてきて，
チベットのチーズとバターは毎年豊作。」(小島晋治監訳・大沼正博訳　世界の教科書シリーズ②『わかりやすい中国の歴史――中国小学校社会教科書』明石書店　2000年11月10日　第１刷　ｐ.37～39)[2)]

国家の中心を中央チベットに移した後，自ら国名を Bod（現代語発音ではポェ）と称したが，これは民族名に由来するのではなく，中央チベット地域に対する古来の呼び名に由来するらしい。中国からは“吐蕃”，ソグド・テュルク・アラブ人からは“Tubbat”などと呼ばれた。欧米，日本における“Tibet”という呼称はそれが伝わったものである。建国後直ちに国家体制が整備され，まず西北インドで使われていたグブタ文字に範をとりチベット文字が制定された。行政統治機構としては，人民を軍戸と民戸に大きく分け，軍戸においては“千戸部”を基本単位とした兵役制度を組織し，民戸については人口と土地を調査して税額を規定した。諸侯・豪族に対しては“官位12階制”を用いて彼らを官僚機構として編成した。

外交手段としてフルに用いられたのは婚姻である。それはチベット内部の諸侯，シャンシュン，スンパ，吐谷渾などの服属国，ネパール，唐などの隣国にまで及んだ。ネパール，唐からは先進文明を取り入れる側面も持っていた。

８世紀後半に至り，チベットはきわめて広大な版図の占領地を持つ大帝国をつくりあげ，東西シルクロード貿易の要衝を掌握した。仏教の伝来以前にチベットにはボン教という宗教があったが，ソンツェン・ガンポ王のとき，仏教が中国とネパールから伝わり，ボン教と対立した。779年，チソンデツェン王は仏教を国教とした。大規模な仏教政策のための出費と広大な領土の維持に要する軍事費は膨大で経済のバランスを崩し，842年，ランダルマが暗殺されるにおよんでチベット帝国はあっけなく崩壊した。しかし国際共通語としてのチベット語はその後も長く使われ続け，11世紀の西夏国におけるチベット語使用にまでつながった。パミール東部の高山地帯にはチベット文明がある程度定着したが，パミール西部，東トルキスタン，河西などではチベット文明は根づかなかった。

＜第２期＞12世紀以降　教団支配の時代

有力氏族と結合した仏教教団が互いに争いつつ，モンゴル・満州など外部の

軍事力を背景にチベットの統治権を得ようとする。この構図は17世紀にダライ・ラマを法王とする政庁が実質的に成立することによって完成し，一応の安定を得た。この時期，仏教が広く浸透し，ダライ・ラマへの帰依がチベット人のアイデンティティーの一つとなっていった。チベット帝国崩壊後，チベット皇帝の子孫が，東北チベット青海地方と西チベットのグゲ地方に建てた二つの王国において仏教が維持され，そこから新たな仏教，特に戒律復興が始まった。11，12世紀に各地に成立した宗派は権力構造と結びつく形で発展し，13世紀には，カダム派（後，ゲルク派に発展），サキャ派，カルマ・カギュ派，ニンマ派などおもな宗派が出揃った。土地財産所有者でもある僧院はその存続のために「おじおい相続」と「活佛制度」[3] という二通りの相続制度を編み出した。

僧院と豪族による土地（荘園）支配という形で始まったチベットの封建制は成熟する間もなく，モンゴル帝国の大波にのみ込まれた。だが，仏教の存在がモンゴルとの関係を特異なものにし，それがチベットのその後の国家体制のあり方を決定する。パクパがフビライ＝カーンの師（帝師）となり，その後歴代のモンゴル皇帝がチベット仏教に帰依するに至って「ラマ・檀越」関係[4] として定着する。この関係はその後のチベットの政治構造の基本となる。元朝崩壊後，17世紀中葉，ゲルク派のダライ・ラマ３世がアルタン＝ハーンと，次にダライ・ラマ５世がグシ＝ハーンと「ラマ・檀越」関係を結ぶことによってゲルク派によるチベット支配，すなわちダライ・ラマ政権が成立するのである。「ラマ・檀越」関係は清朝皇帝との間にも結ばれたが，漢人王朝である明朝皇帝との間には成立しなかった。明確な国家意識を持たないまま今世紀に入ったチベットは，イギリス，中国，インドの政治的駆け引きの中で自立の機会を逸し，ダライ・ラマ政府はインドに亡命し，チベット本土は漢民族の直接統治を初めて受けることになったのである。

チベット仏教はさらにモンゴル，満州および彼らの支配下の中国にも伝わる。特にモンゴル人のチベット仏教信仰によってチベット仏教圏は東北アジアに拡

散した。しかし，強力な政治・軍事力を持たない法王が，外国の軍事力に依存して統治する特異な国家体制をとったために近代的な統一国家の意識は希薄で，それが20世紀に入ってチベットが独立国として立てなかった一つの原因となる。

＜第３期＞20世紀中葉以降　中華人民共和国時代

第３期とは中華人民共和国の版図に強制的に組み込まれて以後を指す。チベット文明は，他の文明の「直接的・実質的」支配を初めて受けることになり，大きな変革を余儀なくされている。文化大革命期には多くの寺院が破壊され，チベットの伝統文化は大きな打撃をこうむった。また漢人の大規模な流入はチベットの従来の生態系を破壊する結果を招いた。文革後，中国政府はチベット政策の誤りを認め，チベットの自治を尊重する政策を打ち出した。だがそれは結果的にチベット人の独立への要求を煽ることになった。それはチベット民族・文明のアイデンティティーの強さ，そしてチベット文明が中国・漢文明とは異なる独自の存在であることを明確に示している。チベットと中国の関係がどうなるのか，今後とも目が離せない[5)]。

《チベット族の服飾について》

古い青蔵高原はチベット族，メンパ族，ロッパ族などの少数民族が代々繁栄してきた地である。雄大なヒマラヤ山とゆったりしたヤルンツァンポ河がそれらの民族の豪放磊落な性格を作り出し，青蔵高原に他の地域とは異なる民族服飾文化を形成した。チベット族の衣装には悠久の歴史がある。紀元前11世紀前後にはすでに現代チベット族衣装の基本的な特徴が備わっていたのではないかという説もある。チベットの衣服は古くはペルシャとか東トルコと関係があったといわれているが，唐から文成公主を迎えたソンツェン・ガンポ王が「みずから毛織や裘の衣服を脱ぎ，薄絹や綾絹の服を着，漸次中国の風俗を慕うようになった」（旧唐書・吐蕃伝・上）と伝えられているから，中国の影響も相当に大きかったと思われる。[6)]

その後，チベット各地に居住する他民族との交流を通し，多くの影響を受けながら衣装も絶えず変化，発展を遂げてきた。雪域高原では強烈な特色を持ったチベット族の服飾が作られ，それらは神秘的な高原文化と融合して，豪華で，荘重で，魂を奪うような視覚効果を有している。その豪華さについては次のような報道がある。

（四川省）シャッチン県の歌舞は豪華な衣装で知られる。04年10月，パリで催された中国文化年の行事「民族衣装展」にもチベットの代表として出場。ショーに出演したグロンレンチンさんは，家に伝わる時価400万元（約6000万円）相当という装束を身にまとった。金，銀，サンゴ，メノウ，トルコ石など宝飾品がいっぱい。「重さは帽子だけで18キロ。500万元（約7500万円）の保険をかけて行った」(『朝日新聞』夕刊「変わるシャングリラ」⑥　06年11月16日)

チベット族はチベット，青海，四川，雲南，甘粛の広大な地区に分布しているため服飾の様式は比較的多様で，農業区と牧畜区にも区別があるが，普遍的な特長について言えば以下のようになる。

＊チュパ（phyu pa）

チベット族の服装の特色を最もよく表現するのはチュパ（phyu pa）つまりチベット袍（袍は外側に着る長い着物を指す）である。和服と似て，斜めに下がった襟を前で合わせて着る。材質は牧民は羊皮[7]を用い，内側は毛，外側は皮で，農民はプルである。プルとはチベット産の羊やヤクの厚い毛織物の一種“帮典”で，色彩と図案に凝っている。チベット族の伝統的な衣料で最も特色があるのはこのプルであり，その種々の色縞のプルは女性の前掛けにしたり，男性の袍の縁飾りにすることもできる。真紅，朱色，オレンジ，レモン色，緑，紺，空色，白，紫などの色縞が複雑に交じり合う中にも規律性が見られ，きらきら輝く色彩の効果を生み出している。

“世界の屋根”と称される青蔵高原に暮らすチベット族と，モンゴル高原に生活するモンゴル族は，長い袍を自己の伝統的服装として愛してきた。高原性

の気候はしばしば日中は日差しが強烈で，気温が比較的高いが，夜は気温がにわかに下がり，寒気が襲う。「チベットでは一日の中に四季がある」と言われるほど一日の中でも気温の変化が激しいが，労働環境と物質条件が一日に三回服を取り替えることを許さない。そこで絶対多数の労働者は一年中皮の袍を着用している。衿は大きく，袖は手より４寸ばかり長いので手首まで巻き上げている。袍は長くて広く，裾は足より３寸ばかり長く，横になって休憩したり眠ったりするときには腰帯を解き，衣服すべてで頭から足まで覆う。つまり袍が敷布団にも掛け布団にもなりうるのである。

袍服も地方や男女などによって材質や着こなし方に違いがあり，農業区と牧畜区にも区別がある。牧畜区の服には皮板（毛皮の皮の部分）袍とプル袍の区別があり，質朴簡素で，装飾も質素である。主として牧畜区に流行しているゆったりした皮の袍にはポケットやボタンはなく，普通身長より長い。着用するときは腰帯を中心にして長袍を上に引っ張り上げて胸の下に寄せ，腰の所に袋を作り，物を入れたり，赤ん坊を入れたりできるようにする。それがチベット族の皮の袍の特徴である。男性はたくし上げた裾を後ろで合わせて折り，男女とも長さ7，80センチ，広さ4，50センチの絹の腰帯できつく結ぶ。

農業区の男装の多くはプルを主要衣料とする。衿，袖口，裾に川獺の皮，トラやヒョウの皮や，赤，黒，緑の縁取りがあり，金銀珠玉のアクセサリーをつけ，非常に華やかである。農業区と都市部の女性用チベット袍は多くが黒や種々の色彩のプルで作られ，長袍の下には薄い色の衿なしかハイカラーの右おくみの上着を着る。ブラウスを着て，外側をたっぷりした長いプルの袖なしのチョッキで覆う女性もいる。冬は長袖，夏は袖なしに色鮮やかなシルクのブラウスの袖を出し，典雅で端正である。

チベット族の着衣の特徴は右腕を出すのを好むことで，袖を腕の後ろに置くか腰に挟む。釈迦牟尼が法を弟子に授けるとき右腕を肌脱ぎにしていた作法を真似たものだというが，右袖を脱いだり，あるいは両袖を脱いで帯に突っ込ん

で上半身をあらわにしたり，腰に挟んだりすると仕事がしやすいため，月日の経つうちに一種の着装方法となったものである。袍の下には布製の下着を着るが，胸をはだけて下着を着ない場合もある。この習慣は前述のように高原地区の変わりやすい悪い気候とも関係があり，放熱しやすく，体温の調節に便利なように昼の暑い時には脱ぎ，朝晩の寒い時には着るのである。昔は男子は袍服の中では上半身裸で，どす黒くたくましい腕は高原の人特有の質朴雄壮さを表わしていた。生活水準の上昇と現代都市の服飾の影響を受けて，対外的交際や盛大な祭りの時はチベット族の男子もすでに袍服の中に白いシャツを着るようになった。

この袍服は男女老幼を問わず皆着用している。男女の袍は形はほぼ同様で，裏が獣の皮で表がラシャである。普段は男袍の多くは無地で，広幅の縁取りをしているが，祭日の盛装には彩色の縁取りをしたものを着用する。女袍の縁取りはさらに艶麗である。最も代表的な縁取りに使用されている材料はプルである。とりわけ牧民のチベット袍の縁取りには藍，緑，紫，青，オレンジ，黄などの色の縦縞模様を組み合わせた色とりどりのテープを常用する。女性用皮袍の肩，裾と袖口には巾10センチ近い黄，紅，緑，紫の縞模様を常用し，さらによく紅に緑，白に黒，紅に藍，黄に紫など補色を大胆に使用する。時にはさらに強烈な対比の中に金糸や銀糸を挟み，明快で調和のとれた芸術効果は強烈な芸術的感染力を与える。

チベット族の婦女はいつもチベット語で言う「邦単」（パンデン pang gdam）と呼ばれる赤や青，黄，緑などの鮮やかな横縞模様の毛織物の前掛けをする。それを婚前婚後の区別とする地域もあり，ラサではそれは既婚者だけが着用する。各地に散居しているチベット族の女性が皆これを着用しているわけではないが，パンデンは依然としてチベット族の女性の典型的な服飾である。

服飾の図案は対照的な色を好み，単純にして強烈で，幾何模様が多い。この種の典型的な蔵服はすでに人びとによく知られるようになった。

＊アクセサリー

「チベットの伝統服飾文化は“完全装飾”である。男女を問わず，盛装をしたチベット族は頭に珊瑚やトルコ石で作った髪飾りを挿し，金銀をあしらったトルコ石の耳飾りを下げ，左手には銀，右手には白ホラガイの腕輪をはめている。白ホラガイは幼いころから身に着けており，死後幸福の地へと導いてくれるといわれている。首からは蜜蝋玉を下げ，胸元には護身佛などを入れた銀ケースを下げている。腰には銀色の何連もの鎖で結ばれた銀色のお護り入れの箱，火打ち道具，ナイフ，子安貝の飾りベルト締める。これら装身具はチベット族の職人の手によるもので，特に金銀細工の技術には目を見張るものがある。チベット族はその芸術性と文化性を愛し，日常生活に登場する動植物や理想上の縁起物を装身具の模様として取り入れることに長けている。

伝統の遊牧生活は常に水，草が豊富な場所へと移動していくものであるため，それまで祖先が蓄えてきた財産はすべて宝石や装身具に換え身に着けた。そのほうが便利で安全だからだ。彼らが身に着けているものはただの服飾品ではなく巨大な財産であり，また美しいだけではなく富の象徴なのだ。

チベット族のアクセサリーには材料の種類やそのデザインによってさまざまな意味が込められているという。例えば古来よりチベットに伝わる天珠（シィgzi）という霊石（パワーストーン）はメノウに特殊な腐食加工で宗教的図案を施したもので，図案によって様々なパワーを持つといわれている。二重丸のような「参眼天珠」は仏の第三の目を象徴する図案とされ，幸福や財を呼び寄せる力を持つ。雲のような模様の「如意天珠」は意欲を表し，願いをかなえ，波のような模様の「水紋天珠」はあらゆるものを清める力を持つとされ，魔除けのほか万物を育む水のように悠々自適の道を示すといわれている」[8)]。

頭飾り（パドル）から耳飾り，胸飾り，腰飾り，指輪に至るまで材質は非常に豊富で，金，銀，銅，真珠，玉，松石，絹，翡翠，珊瑚，蜜蝋，琥珀，象牙，トルコ石などの宝石類が珍重される。その中で最も代表的なのは巴珠で，これ

は三角形あるいは弓形の頭飾りで，昔，貴族は真珠や宝石を使い，一般の人は珊瑚を用いた。娘が初めて巴珠をつけるときは厳粛な儀礼を行わなければならない。というのはそれは成年を意味し，それから婚姻できるからである。チベット人の胸の前の真珠，銀鎖，銀牌などは多くは仏教と関係がある。真珠飾は佛珠であり，さらに人びとがみな身につけているのは護身用の仏像あるいは菩薩像を入れた銀の小箱である。首や胸，腰部の飾りが最も精巧で，例えば佛珠，銀札，銀のネックレス，銀の輪など品種も豊富である。

＊髪型

チベット族の女子は髪型と髪飾りを非常に重視する。特に牧畜区の婦女は，半分以上のアクセサリーが頭部に集中する。チベット族の髪型はばらばらで肩にかかっていたり，頭を頭巾で巻いたりする。あるいは髪の中に多色の紐を入れて作り上げたお下げを頭の上に巻き，美しいお下げの箍とする。前髪は何本もの三つ編を眉毛の上でまた三つ編で横に編みつなげ，まるで額に庇がかかっているような女性もいる。編み込んだ頭上から腰にかけては，どれも大きなトルコ石，サンゴ，琥珀を幾つも縫いつけた飾り帯が垂れている。

農業区の人の多くは二本のお下げ，牧畜区の人は普通お下げの数が多い。お下げはチベット族の女子の主要な髪型で，長いお下げと若干の小さなお下げの４種の類型に分けられる。一般的な規則は１本のお下げは未婚，２本なら既婚を表わす。多くのお下げの中に主要なお下げが１本だけなら未婚，２本なら既婚を表わす。アンダ地区の婦女は70～80本のお下げ，カンパ地区は108本，ナチュー帯はさらに多く，120～150本に達する。頭を梳ってお下げを編むときは通常数人の手伝いを必要とする。

一般的には多くの地方のチベット族の女性は長髪が肩にかかり，日に焼けて赤くなった顔，濃い眉に大きな目，高い鼻と釣り合って，高原の女性の風采は格別に目を引く。

男子は今は多くが短髪であるが，昔はお下げで，弁髪を頭の上で巻き，象牙

や牛骨で作ったワッカを飾り，頭の後ろに垂らしていた[9]。髪型から透けて見える原始的な野性味は，チベット高原独特のものである。

＊帽子

チベット族の帽子の様式は多く，頭に頭巾あるいはつばを横巻きにした毛皮の帽子をかぶり，帽子のつばが前方から上に跳ね上がっているものもある。

ラサとシガツェ一帯では冬にはよく金糸の緞子，金銀の絹のテープ，プル，毛皮などで入念に作られた金花帽をかぶる。それには男女の区別がある。暖かい季節にはよくラシャの礼帽をかぶる。男子は冬にはつばの広いフェルト[10]の帽子，女子はつばのないフェルトの帽子をかぶる。チベット族の男子がかぶっている帽子にはとても特色がある。筒型，ラッパ型があり，最も多いのは前つばを露出したもので，細い金で飾ったものもあり，非常に美しい。夏にはフェルトの礼帽が多い。

＊靴

靴の種類は多いが，チベット族，モンゴル族，ハサック族など牧民はよくブーツを履く。「ソムパ」という皮製の，底の柔らかいブーツで，爪先がそり上がって尖り，絹糸の透かしと模様があり，寒さを防ぐだけではなく軽便でもあるし，馬に乗って走るときすねを摩擦するのを防げる。中が広く，騎乗者が馬から下りるとき，靴が鐙に挟まれても足を簡単に靴から抜き出すことができ，奔馬が人を引きずって怪我を負わせるのを免れることができる靴もある。

毛織物，皮革などをつなぎ合わせて作り，底が固く，両側が柔らかいので暖かくはき易いブーツもある。長靴の表とその両側は赤，白，緑，黒などの色布で作られた模様があり，どれも美しい雲形などの模様に切り，それぞれの間を金の縁にし，この上なく鮮やかでありながら，長靴の後部に長さ十数センチのスリットが入れられ，履いてから上部を紐で巻いてとめ，着脱が便利なようになっている。

渡辺氏は靴について次のような興味深い紹介をしている。

「チベットの伝統的な履き物は，フェルトの長靴だが，簡便さで言えば革靴，あるいは布製の短靴がずっと勝るし，だから今はフェルトの長靴姿は少ない。けれどもここ（東チベット，カムで最大のゲルク派寺院・マゲン・ゴンパ＜ゴンパは僧院のこと＞を指す・・・筆者註）の僧達はみんな伝統的なフェルトの靴で，もし革靴，布靴を履いているのが見つかったら，履いていた靴を脱がされ，週日裸足で，脱いだ靴を首からぶらさげたままの格好を仲間の僧たちに晒すのだ，という。寺の小僧たちが最初に習うのは衣の着け方や法具の扱い方だ。そしてそれらの象徴的な意味について教えられる。フェルトの長靴は蛇と豚と雄鶏に似せて作られていることも，そしてそれは怒りとむさぼりと愚痴という人間の三悪を象徴するのだということも。だから日々その靴を履くたびに，彼らは仏の教えを胸に刻みつけるのだという。」[11)]

＊チベット刀

「チベット刀はチベット族伝統の装身具。通常腰にぶら下げていることから腰刀と呼ぶ。チベットの人にとって，腰刀は生涯付き合っていく“伴侶”である。幼いころから使い始め，死ぬまで肌身離さず身に付けている。腰刀にはサイズで分類すると長刀，短刀，小刀の３種類がある。長いものでおよそ60cm～１m，20cm に足りない短刀もある。用途は幅広く，山林に入って枝を伐採したり，家畜を処理したり，食材を切るのにも使われる。もちろん昔は武器としても使われていた。

腰刀はチベット民族の生活に必要不可欠な道具であるだけでなく，その独特な形状により，芸術品としても非常に高く評価されている。チベット民族が紹介されるときには必ずといってよいほど，この腰刀が登場する。

きらびやかな装飾の腰刀は今では旅行のお土産や贈り物として高い人気を誇っている。刀身は質の良い鋼材でできており，刃は切れ味良く輝いている（もちろんお土産用は切れ味鈍く作られているが・・・)。

チベット刀の柄は牛の角や骨，木材でできており，比較的高価なものになる

と，銀や銅が巻きつけてある。鞘も凝っており，木鞘や皮鞘以外，多くは黄銅や白銅でくるんだものや，白銀や金をちりばめたものまである。また精美な鳥獣，草花模様の彫刻がされており，あるものは宝石がはめ込まれているなど，とても華やかで持ち主の富を象徴するものだ。

腰刀で有名な産地はラサ，ダムション（当雄），ラジェ（拉孜），イオン（易貢），チャムド（昌都）などだが，特にラジェで生産されたものは悠久の歴史を持ち，姿形も美しく，刃も鋭い。

チベット人は好んで刀を腰から下げている。刀を差すことがチベット人であることの証明だといっても過言ではない。一般的に男性は“パタン（巴当）”と呼ばれる40～60cm ほどの長刀と，“ルオチ（洛赤）”と呼ばれる20～30cm ほどの短刀を持ち，女性は小型のフルーツナイフほどの小刀を持つ。チベット刀の歴史は優に1000年を超える。今から約1600年前，偶然にも銅，鉄，銀の鉱石を発見した吐蕃民族は，優れた精錬技術で“腰刀”作りを始め，その伝統は現代まで引き継がれている。」[12)]

チベット人は腰にひとつながりのナイフ，火打ち金の小箱および多くの銀の飾をつけているが，その中で腰刀と腰鉤はチベット族の男女独特の佩飾である。長いものは１メートルを超え，短いものでも40～70センチある。さらに40センチ以下の小刀もある。チベット刀の用途は多く，長刀は自衛，短刀は牛や羊を屠殺したり，皮を剥いだり，肉や野菜を切ったりできる。小刀は食器を作るのに使われる。チベット刀は非常に鋭利であるだけでなく，細工も凝っていて，装飾に気を使っている。柄は牛角，獣骨あるいは硬い木でくるみ，さらに銀糸か銅糸を巻きつけ，銅片か鉄片で箍をつけ，さらに銀飾を嵌め込んだものもある。鞘の材料と作り方も非常に精緻で，多くは真鍮か白銀でくるみ，龍，鳳凰，虎，獅子，花卉などの吉祥図案を彫り込み，さらに鮫皮でくるみ，トルコ石，珊瑚，瑪瑙などの貴重な宝石を嵌め込んでいるものもある。柄のところにヤクの角を嵌め込んでいるのが一般的である。

チベット族，モンゴル族は柄のまっすぐな小刀を持っている。それは牧民が肉食を主としていることと切り離せない。

＊腰鉤

女性は腰に腰刀を提げるほか，シガツェ地区ではさらに腰鉤に気を使う。腰鉤は普通白銀で作られるが，青銅を用いたものもある。形は扁平で長く，両端は如意形を呈し，菱形や菱形四角で如意形を呈しているのもある。どんな形のものであれ，腰鉤の下部にはワッカがついていて，装飾のみならず物を掛けられるようになっている。腰鉤の図案は，宝瓶，法輪，鹿などチベット仏教の題材だけでなく，ゴクラクチョウ，獅子，龍など漢族の伝統的題材もある。各種の図案の中には，チベット族の民間故事からきた図案“睦まじい四兄弟”もある。物語ははるか昔，気候が悪く，象，獅子，兎，小鳥は果実でお腹を満たすすべがなかった。後に彼らは団結して，心を合わせてみんな果実をとった。この収穫は物質的ばかりではなく，さらに重要なのは精神上のことであり，睦まじく住んで，共同で生存する道理を，動物の形象および協力して果実をとる情景を通して表現している[13)]。

上述したチベット族の服飾を一言でまとめるならば「長袍，ブーツ，佩刀が奇抜で豪壮な服飾風格を形成した」ということになろう。

註

1) 華梅著・施潔民訳『中国服装史―五千年の歴史を検証するー』白帝社　2003年４月４日　初版　2006年２月25日　３刷　p.229

2) 教科書のこの記述からは，折に触れ起きるチベット独立運動に頭を悩ませる中国政府が，ソンツェン・ガンポと文成公主，とりわけ文成公主の功績を賞揚することによって，チベットとの融和を図ろうとしているように見える。彼女の事績には次のようなものもある。「唐朝になって，文成公主がはるばる吐蕃に嫁いできたとき，多くの経書典籍を携えてきた。その中には天文暦算の書籍が多数あり，それはチベット暦の完成と発展にとってきわめて重要な作用を及ぼした。」(丹増編著『中国少数民族節日』中国画報出版社　2004年１月　第１版　p.10)

(ソンツェン・ガンポ）王はチベット式の顔に赤土を塗る化粧法（宗教上の習慣）を禁止し，毛織や皮衣のかわりに絹衣を薦めたという。(丹羽基二著『天葬の国チベット』芙蓉書房出版　1997年６月12日　第１刷　p.99)

3) 高い学徳を備えた僧を菩薩や仏の生まれかわり（転生）とみなすことはインドや日本の仏教でもよくある。だが，その僧が死後，衆生を救うために何度も生まれかわる，という転生活佛の思想はチベット独自のものだ。この制度によって高僧の財産，権威が相続される。14世紀カルマ派によって始められたが，現在は，各宗派に多くの活仏がいる。ゲルク派の法王ダライ・ラマ活佛は観音菩薩の生まれかわりとされる。(竺沙雅章監修　若松寛編『アジアの歴史と文化』７ 北アジア史　同朋舎　1999年４月20日　第１刷　p.185)

4) 政治権力（＝俗権）においてはモンゴル皇帝が至上であるが，仏法（＝聖権）において皇帝はチベット仏教のラマ（＝高僧）に帰依し，檀越（＝パトロン）として物質的に援助する。(同上 p.185)

5) 同上　p.168～189

6) 事実『中華舊俗』に1920年代のチベットの上流男性の写真が掲載されているが，その服装は一見，漢族と見まがうようなものである。(拓暁堂主編『中華舊俗』新華書店　1997年10月　第１版　p.27)

7) 最近の報道によればダライ・ラマが講演の中で野生動物保護の観点から，皮の着衣をやめるよう呼びかけた。それに応えてラサでは皮衣を集めて焼く人たちも出たという。

8) 別冊聴く中国語35『天空紀行/世界の屋根を行く　青海・チベット鉄道の旅』株式会社日中通信社　2006年10月25日　p.94

　この天珠（シィ）について渡辺一枝氏は『わたしのチベット紀行』(集英社　2000年５月30日　第１刷　p.142～146) で次のように紹介している。

「シィというのはチベット人がお護りに身につけている石で，とっても不思議な石だ。黒に近い濃い茶かそれよりもっと薄い茶色で，白い縞の模様があって，その縞が丸く目のようについている。その目の数もいろいろで，一つと九つのものはとても珍重される。彼らもその模様を『目』と呼ぶが，紡錘形の石に丸い模様なので本当にそれは目のようだ。・・・私が首にかけているシィの下には，丸くて平たいユが一粒，やっぱり赤い紐で結びつけてある。ユはトルコ石のことで，・・・幸運を招き，またこれを身につけていると突然の死から免れると言う。突然の死とは事故などに因るものでなく，突発的な病死のことを言っている。そしてまた，ユを着けていると肝臓の病気にならないとも言う。彼らが身につける装飾類はこんな具合に，おしゃれに着け

るというよりもお護りとして着けているのだ。よく見るチュル（血赤サンゴ）は怪我避けだと言う。」

9) ラダイ・ラマは，自分がポタラ宮を出るときの模様を以下のように回想している。「(黄色い輿に乗った）私を担ぐのは，赤い帽子に緑のケープという出立の二十人の将校たちだ。たいていの上級官僚達は髪を刈り上げているのに，彼らは弁髪で，髪を編んで長く背に垂らしている。輿の黄色は僧院生活を表わし，・・・」(ダライ・ラマ著　山際素男訳『ダライ・ラマ自伝』文藝春秋　2001年６月10日第１刷　2004年４月５日第10刷)

『天空紀行』（註８）にも長い髪を何本にも編んで背中に垂らしたチベット族の男性の写真が掲載されており（p.94)，地方によってはこの習慣がいまだに残っていることが分かる。

10) 包住まいをする人たちの間では，フェルトづくりの伝統を持っている。梳った羊毛をすのこの上に並べ，文様の場合は染色した羊毛をデザインに従って配置し，これをすのこに巻いて，温湯をかけて湿らし，すのこを地上で転がしてフェルトさせる方法が一般的である。(小川安朗著『民族服飾の生態』東京書籍株式会社　昭和54年４月２日　第１刷　p.187)

11) ８『わたしのチベット紀行』p.46～47

12) ８『天空紀行』p.97

13) 何琼著『西部民族文化研究』民族出版社　2004年６月　第１版　2005年１月　北京第２次印刷　p.98～99

＜註以外の主要参考文献＞

＊西蔵仏教文化研究所編『チベット文化入門』　西蔵仏教文化研究所発行　1996年５月20日　初版第１刷　1999年３月15日　改訂第１刷　p.16

＊華梅著『中国服飾』五州伝播出版社　2004年10月　第１版　「蔵区服飾剪影」

＊斉星著　伊藤克訳『中国歳時記』外文出版社　1988年　初版　p.193・p.196

＊市川捷護・市橋雄二『中国55の少数民族を訪ねて』白水社　1998年１月20日　第１刷　1998年４月20日　第２刷発行　p.310

＊馬寅主編　君島久子監訳『概説中国の少数民族』三省堂　1987年12月20日　第１刷　p.221

＊小玉新次郎・大澤陽典編『アジア諸民族の生活文化』阿吽社　1990年２月20日　初版第１刷　p.146

＊李澤奉・劉如仲編著『清代民族図誌』青海人民出版社　1997年12月　第１版　p.127

＊赤塚不二夫・横山孝雄著『マンガ中国の知識百科』株式会社主婦と生活社　1998年９月５日　第１刷
＊馬銀文編著『中華民族芸術大全』中国三峡出版社　2006年１月　第１版
＊『WorldJournal』2006年11月号
＊ユーゴスラヴィア・レヴュー社　中国・上海美術出版社編　ベースボール・マガジン社訳『チベット』ベースボール・マガジン社　1982年10月10日　第１版第１刷